

2022年度 名古屋芸術大学 入学試験問題

特別選抜「社会人入学試験1期」「海外帰国生徒入学試験1期」「外国人留学生入学試験1期」

入試問題

試験科目：「小論文」

日 程：2021年11月20日（土）

試験時間：50分 / 解答字数：800字程度

芸術学部 芸術学科 芸術教養領域

対象コース： リベラルアーツコース

※音楽領域、舞台芸術領域、芸術教養領域、子ども学科で1種類の問題冊子となります。

[課題]

下は、子役から55歳まで女優として活躍した故・高峰秀子について、養女の斎藤明美が記した文章である。これを読み、問1と問2に答えなさい。

高峰は北海道・函館に生まれて、大きな蕎麦屋料亭の娘として両親のもとで何不自由なく暮らしていたが、五歳の誕生日に実母が結核死。葬儀の翌日、かねてから秀子を欲しがっていた実父の妹によって東京へ連れていかれる。映画デビューしたのはそのわずか半年後のことである。従って、「親」に当たるのは養母だ。養父もいたにはいたが、彼は元活弁士でその頃は芸能ブローカーのような仕事をしていて家にはあまり寄りつかず、養母とは初め内縁の関係だったから、通常は母一人子一人の生活だった。

この高峰の養母は、どの子役の親にも追隨を許さぬほど“勘違い”していた。

(中略)

幾つかの“たまたま”によって五十年の女優人生が始まってしまったことを、高峰は、

「災難です、災難。大災難！」

臍ほぞをかむような面差おもぞしで言い放ったものだ。

当時、松竹の子役まかないの給料は安かったから家計は苦しく、養母は六畳一間のアパートで人形の着物を縫う内職をしたり、同じアパートに住む大学生の賄けなげをして暮らしの足しにした。ここまではむしろ健気な母だったのである。

変わったのは、秀子が十三歳で東宝に引き抜かれてからだ。成瀬巳喜男、山本嘉次郎など多くの監督と、入江たか子、林長二郎(のちの長谷川一夫)など多くの人気俳優とともに、秀子もただ一人の子役として東宝へ引き抜かれた。つまりそれほどすでに人気が出ていたからであるが、移籍の条件として東宝は、松竹の二倍の給料と世田谷区成城の戸建てを提示した。

もちろん養母は一も二もなく承諾したが、高峰は「お世話になった松竹を去るのは……」と悩み、自分を可愛がっていた松竹所属の先輩・田中絹代に相談した。「秀子さんとお別れするのは寂しいけれど、それが秀子さんのためになるなら東宝へ行きなさい」、田中の言葉に励まされ、秀子は東宝に自ら条件を出した、「女学校に入れてくれるなら」。それは、撮影が忙しくて小学校に通算一カ月しか通えなかった秀子が、生まれて初めて出した“要求”だった。

(中略) 秀子は次々に仕事をし、収入も増えた。そして養母が変わった。「金さえありゃあ、團十郎だって買えるんだ」、この言葉に象徴されるように、彼女は金の亡者となり、函館から破産した自身の父親、即ち秀子の祖父を筆頭に、実に十一人の親戚を呼び寄せて、彼らの生活をすべて幼い秀子に負わせたのである。

芸能界広しと言えど、これほど大勢の血縁を養い続けた子役はいないだろう。

しかし秀子の養母が犯した最大の罪は、我が子から学ぶ機会を奪ったことである。

「(美空)ひばりさんが羨ましかった。お母さんはひばりさんに家庭教師を付けた。いいお母さんだったと思う」
私が高峰の口から「羨ましい」という言葉を聞いたのは、後にも先にもこの時だけだ。

(中略)

子供のことを考える親なら、ひばりさんの母上のように家庭教師を付けるだろう。あるいは仕事の量をセーブすることだってできる。だが高峰の養母は「疲れたろう」「仕事は好きか？」の一言もなく、ただ娘を働かせ、札束で^{つら}面を叩くようにして一族郎党に権勢を振るい、娘の向学心を踏みにじった。

養母は秀子の稼ぎが増えると、東宝から与えられた家を出て、豪邸を買い込み七人ものお手伝いさんを雇い、自分のために麻雀部屋を造ってしょっちゅう仲間を呼んでは遊び、秀子にはスパイのお手伝いさんをつけて二十四時間監視、秀子に来る手紙も出す手紙もすべて事前に検閲した。秀子が就寝前のわずかな自由時間に本を読んでいると、「私への当てつけか！」と電燈を消した。高峰が独学しなければ、養母と同じ文盲となっていたはずだ。

「あの人は、私にとって反面教師だった」

高峰秀子の養母とは、そういう人だった。

斎藤明美『子役から大成した 後編』(『女優にあるまじき高峰秀子』、2018、草思社所収)

(中略は引用者による)

問1

高峰秀子にとっての養母はどのような人か、著者の斎藤が述べたことを100字程度にまとめなさい。自分の意見や感想は入れないこと。

問2

著者の斎藤によれば、高峰秀子は学校に行きたくとも行けなかったが、向学心を持ち続け、教養の深い人だったという。このことと、上の文章をふまえ、あなたが自分自身や周囲の人の向学心、もしくは対照的に学ぶことを嫌う姿勢に触れた体験のなかで、教養について考えたことを700字程度にまとめなさい。

[出題の意図等] ※問題用紙には記載されません。

日本の高校に通う三年生徒や浪人生を対象としない、「社会人・海外帰国生徒・外国人留学生の入学選抜」という入試形態をふまえ、下の項目の関心の度合いや力をみるため。

<学んできたことの整理と分析(自らの発想と知恵を活用できる基礎力)>

- ・芸術活動にとり重要な「向学心」について意識的に生活しているか。
- ・自身をふくむさまざまな人の学ぶ姿勢について、整理し、内容を記憶しているか。
- ・芸術教養の学びと向学心について考察できるか。

<基本的な日本語運用力と思考の客観性>

- ・問題文の意味を読み取れているか。
- ・事実(問1)と思考・感情(問2)を区別し記述できているか。
- ・感想を交えず要旨を客観的に記述できているか。問1と問2の混同がないか。

AP:音楽、美術とデザイン、現代の多様な文化と社会に関心があり、自らの発想と知恵、感覚をいかし、地域と社会がかかえる課題を、協働して解決していく意欲のある人を求める。

2022年度 名古屋芸術大学 入学試験問題

特別選抜「社会人入学試験2期」「海外帰国生徒入学試験2期」「外国人留学生入学試験2期」

入試問題提出様式

試験科目：「小論文」

日 程：2022年2月2日（水）

試験時間：50分 / 解答字数：800字程度

芸術 学部 芸術 学科 芸術教養 領域

対象コース： リベラルアーツコース

※音楽領域、舞台芸術領域、芸術教養領域、子ども学科で1種類の問題冊子となります。

[課題]

下記の文章を読み、問1と問2に答えなさい。

アメリカでは、(中略)ラジオが一般家庭に広まり始めた一九二〇年代には、ラジオは家族団欒を演出する機器として、高尚な文化を育て、大衆の教養を高めるべきものだと考えられていた。こうした中、企画されたものの一つが料理番組である。(家庭で作る)料理は女性が担うものという当時の考え方を反映し、女性(主婦)に料理を教えるための番組として放送されたのだ。ちなみに、想定されていた主な対象は女性であったものの、実際には男性聴取者も少なからずいた。

その後、テレビ放送が一般化したことで、料理番組も視聴覚を通して伝えられるようになった。料理の工程や材料を理解するだけならば、料理本を読めば事足りるかもしれない。もしくはラジオ番組の説明を聞くだけでもおおよそ料理の手順はわかるだろう。一方、テレビ番組では、文字で読んだり、説明を聞いたりするだけではなく、料理の焼き具合や切り方などを見ることが可能となり、視聴者が自分で料理をする際に調理加減やできあがり想像しやすくなったといえる。

このような違いはあるものの、ラジオ番組同様、初期のテレビ料理番組も、女性の「教育」を目的に、料理の知識やノウハウを伝えることが中心だった。特に一九四〇年代から五〇年代にかけては、家政学や栄養学の専門家(多くは女性で、ホームエコノミストとも呼ばれる)が講師となって、料理方法を伝えるものだった。(中略)

その例外の一つは、戦後間もない一九四六年から四七年に放送された、シェフのジェームズ・ビアードによる『I Love to Eat (食べるの大好き)』かもしれない。ビアードは、地元食材や新鮮な材料を使った料理を広めることに努め、アメリカ料理界に多大な影響を残した人物であったが、この番組をきっかけに、シェフとして広く知られるようになった。料理番組のアイコン的なパーソナリティの草分け的存在で、いわゆる「セレブリティ・シェフ」と呼ばれるメディアを通して有名になった料理人の一人でもある。(中略)

日本でも、料理番組は教育のみならずエンタメ的性格を帯びるようになった。一九五〇年代から六〇年代にかけて放送が開始された初期の料理番組は、主に料理法を伝える教育を目的としたものであった。例えば、一九五七年に始まった『きょうの料理』や一九六二年から続く『キューピー3分クッキング』などである。

その後、教育番組としてのテレビ料理番組から脱却を図ったものの一つが、一九七五年に始まった『料理天国』(一九九二年終了)である。従来の番組のように、講師が調理台の後ろに立ち、料理をしながら視聴者に調理方法を伝授することを主眼に置くのではなく、(料理人ではない)出演者が料理を食べ感想を言い合うシーンやゲストのお気に入りの店を紹介するコーナーなどもあり、料理を食べること、そして見ることをエンタメとして提供するようになった。料理番組の目的は、教育中心であったものから、おいしそう、面白い、楽しい、といった感情に訴える、または感情を引き出すことへと拡張していったのである。

こうしたエンタメとしての料理・グルメ番組は、一九九〇年代以降増加していくことになる。日本でいえば、一九九三年から六年間放送された『料理の鉄人』や一九九四年から二〇一六年まで続いた『チューボーですよ!』、一九九七年から二〇〇六年まで放送された『どっちの料理ショー』、一九九八年から現在も続いている『ゴチになります』などが挙げられるだろう。(中略)

見世物であるエンタメとしてのグルメ番組において、食べ物の見た目、プレゼンテーションの仕方は当然重要となる。照明やクローズアップなどの撮影技術を駆使して、おいしそうに見せるための画作りが行われる。キラキラと照りのあるステーキや鮮やかな緑が眩しいサラダ、濃厚そうな白濁したスープから湯気が立つラーメンなど、番組の中で食べ物は、画面を彩る小道具(プロップ)として用いられるのだ。このような視聴者の食欲を刺激する画に続いて、出演者が料理を皿から持ち上げる様子や口を大きく開けて食べる姿が映し出される。(中略)食べ物は見るためのモノとなり、その色や全体の見た目は、味や新鮮さを伝えるだけでなく(むしろそれ以上に)、食欲をかき立て、視聴者を楽しませることを最終目的として作り出されるようになったのである。

久野愛『コラム 教育からエンタメへ』(『視覚化する味覚』、2021、岩波書店所収)

(中略は引用者による)

問1

著者は一九二〇年代から現代にかけて、料理番組のあり方や性質がどのように変化したと考えているのか、100字程度にまとめなさい。自分の意見や感想は入れないこと。

問2

あなたが過去に見たテレビ番組(※)の中で、テレビ放送の特質をよく生かしており、優れた番組だと思うものの番組名を1つあげてください。また、その番組の内容と、どのような点が優れていたのか、700字程度にまとめなさい。

※テレビ番組は、料理番組に限定せず、スポーツ番組、音楽番組、クイズ番組、バラエティー番組等々、多様なジャンルの中から選んでもかまいません。また、地上波、BS、CS等で放映されたものだけではなく、YouTube等のオンラインで視聴したものについて書いてもかまいません。

[出題の意図等] ※問題用紙には記載されません。

日本の高校に通う三年生徒や浪人生を対象としない、「社会人・海外帰国生徒・外国人留学生の入学選抜」という入試形態をふまえ、下の項目の関心の度合いや力をみるため。

<与えられた情報の整理と分析>

- ・メディアの性質とそれを利用した伝達方法の工夫に対して関心があるか。
- ・伝達内容の多様性と、有効な伝達方法、それを享受する側の反応に対して自覚的か。
- ・「優れた番組」の選択とその理由の中に芸術教養の学びにつながる分析力や批評性の萌芽が見られるか。

<基本的な日本語運用力と思考の客観性>

- ・問題文の意味を読み取れているか。
- ・記述されたことの要約(問1)自身の考えとその根拠(問2)を区別し記述できているか。
- ・問1と問2の混同がないか。

AP:音楽、美術とデザイン、現代の多様な文化と社会に関心があり、自らの発想と知恵、感覚をいかし、地域と社会がかかえる課題を、協働して解決していく意欲のある人を求める。